

修士論文概要制限コラージュ法による健康的な攻撃性の考察
—PDIにおける制限指向性に注目して—

長谷川 知花

1. 問題と目的

我が国の犯罪件数は決して少ないとは言えないのが現状である。犯罪と言うと殺人や窃盗、放火など様々な種類が挙げられるが、共通しているのはそこに攻撃性が存在しているということである。

攻撃性の高い人々と相性が良いと言われてるのが投影法であり、中でもコラージュ療法は「持ち運べる箱庭」とも呼ばれており、限定法や分析方法についても多くの研究が報告されている(森谷, 1993)。また布施川(2018)は、グループでのコラージュ体験についてのインタビュー調査を行っており、その際製作者側に次回以降作成する際の「○○のような作品を作りたい」「○○のようには作りたくない」等“こだわり”が存在することを報告している。本研究では、この“こだわり”に着目し、これを「指向性」とした。

本研究の目的としては、コラージュ作品の分析として、描画後での言語的な報告を求めるPDI (Post Drawing Interrogation)部分に着目し、その中で布施川の方法に基づく「指向性」に関する尺度を作成し、その分析の可能性を探るべくパーソナリティ要因との関連を検討することである。

2. 方法

(1) 倫理的配慮: 任意で無記名のアンケートとコラージュ作成を依頼した。個人情報保護等に関する説明を口頭とフェイスシートにて記載した。

(2) 参加者: S大学に通う学生59名(平均年齢20.5歳、男性24名女性36名)

(3) 手続き: 集団法にてマガジン・ピクチャー・コラージュ法を用いて台紙サイズはA5版、紙片は6枚という制限コラージュの後に質

問紙を実施した。使用した尺度は以下の3尺度である。①本論の調査から尺度構成した「指向性」尺度、②日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(以下BAQ)(安藤ら, 1999)、4因子5件法、③本来感尺度(伊藤・小玉, 2006)、7項目5件法。なお①の尺度に関しては、コラージュ制作を繰り返し体験した心理学系院生へのインタビュー調査、布施川(2018)での半構造化面接による結果であるプロトコル等を参照し、40項目7件法の尺度を作成した。なお今回、「指向性」「攻撃性」の適応的な側面を検討することから本来感尺度を採用している。

3. 結果と考察

(1) 「指向性」尺度の作成

因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、28項目因子を抽出した。因子はそれぞれ「アート作品指向性」「視覚的印象指向性」「紙片部分配置指向性」とした。それぞれのクロンバックの α は.868、.823、.791であり、内的整合性を確認した。

(2) 重回帰分析からの分析

「本来感」に対するコラージュ作品の「指向性」3因子からの影響について検討する為に重回帰分析(強制投入法)を行った。その結果、標準偏回帰係数として「アート作品指向性」因子から正に($\beta=.301$, $p<.05$)、「紙片部分配置を指向性」の高さが負($\beta=-.408$, $p<.01$)での影響、「視覚的印象指向性」は有意な影響はみられなかった($\beta=.074$, ns)。

「アート作品指向性」については創造性を伴う指向性として有意であることは理解できる。しかしながら「視覚的印象指向性」も紙片間の統合を図る指向性であるが有意とならず、特に、「指向性」であるにも関わらず「紙片部分配置指向性」で本来感に負の影響となっ

たことは意外な結果であった。

しかしながら、PDIによる分析として「指向性」が被験者の適応状況にその内容から明確な方向性を示していることが分かった。

本来感に対する「BAQ」4因子の影響を検討する為に重回帰分析（強制投入法）を実施した。「身体的攻撃性」は有意ではなく（ $\beta=.036$, ns）、短気、敵意は負に（ $\beta=-.553$, $p<.01$ ）（ $\beta=-.718$, $p<.01$ ）、言語的攻撃性は正（ $\beta=.781$, $p<.05$ ）として影響を与えていた。これらから「身体的攻撃性」そのものが必ずしも「本来感」を阻害する影響とはならないこと、「言語的攻撃性」が逆に「本来感」を高める結果となった。攻撃性が必ずしも適応状況に負の影響を与えるものでないことが示されている。

(3) 被験者間分散分析からの検討

「本来感」を従属変数として「BAQ」と「指向性」それぞれの因子間の交互作用を検討するために、因子それぞれの尺度得点の平均から上位群(H群)と下位群(L群)に分け、 2×2 の被験者間分散分析を行った。結果として「BAQ」の「身体的攻撃性」因子が「指向性」因子「視覚的印象指向性」との間で交互作用が有意となった（ $F(df:1.66)=4.056$, $p<0.5$ ）。重回帰分析では「視覚的印象指向性」による標準偏回帰係数が「本来感」への影響として有意とはならなかったが、身体的攻撃性が低い場合は「視覚的印象指向性」の高い者で「本来感」が高いことを示している。

交互作用があった部分を除いた各因子の主効果の結果である。「アート作品指向性」では「BAQ」4因子全てで、その指向性が高い場合、本来感が高い結果となっている（ $F(df:1.66)=6.330$, $p<0.5$, $F(df:1.66)=6.090$, $p<0.5$, $F(df:1.66)=5.820$, $p<0.5$, $F(df:1.66)=5.560$, $p<0.5$ ）。「紙片部分配置指向性」では主効果として「身体的攻撃性」「短気」の指向性が低い場合に

「本来感」が高くなっている（ $F(df:1.66)=5.183$, $p<0.5$, $F(df:1.66)=4.064$, $p<0.5$ ）。

4. まとめ

以上から、○「指向性」尺度を3因子構造として作成しえた、○その「指向性」3因子と「本来感」との関連から制作者の適応状況を分析しえることを示した。○「BAQ」4因子の中で「言語的攻撃性」の高群が「本来感」得点が高く、○「BAQ」4因子と「指向性」3因子の交互作用から「BAQ」の「身体的攻撃性」において「視覚的印象指向性」との交互作用を指摘した。

コラージュ制作のPDIとしての「指向性」に対して量的な検討を行った。コラージュ制作では作品ごとの変化も大きい、制作の指向性では、制作者の攻撃性にある健康的な側面を特性論的に見立てる情報として期待できるといえよう。コラージュ制作でのPDIである「指向性」が適応状況と関連していること、様々なパーソナリティ要因との間でPDIに対して量的な研究を展開する可能性を示した。

<引用文献>

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志ら (1999). 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討. 心理学研究, 70(5), 384-392.
- 布施川貴子 (2018). A 5判サイズ新聞コラージュにおける心的過程: シェアリング・グループ体験からの検討.
- 伊藤正哉・小玉正博. (2006). 自分らしくある感覚(本来感)に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討. 健康心理学研究, 19(2), 36-43.
- 森谷寛之.(1999). コラージュ療法実践の手引き: その起源からアセスメントまで. 心理学研究. 株式会社金剛出版